

プログラム・ノート

飯尾洋一

1993年の創設以来、ドイツのクロンベルク・アカデミーは世界的奏者を講師陣に招いて、すぐれた若手奏者たちを世に送り出してきた。精鋭ぞろいのアカデミー生たちと講師陣が、室内楽の醍醐味を伝える。

ショスタコーヴィチ：ピアノ三重奏曲第1番 ハ短調 作品8

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)のピアノ三重奏曲第1番は、1923年、ペトログラード音楽院在学中の17歳の年に作曲された。リンパ腺結核のためクリミアのサナトリウムで療養していた頃に書かれ、ショスタコーヴィチはここで出会ったタチヤーナ・グリヴェンコと恋に落ちて作品を献呈した。当初の題は「詩曲 Poème」。家計を助けるため無声映画の伴奏ピアニストとして働いた際、ショスタコーヴィチは友人たちとともに映画に合わせて本作品を演奏し、観客の不興を買ったという。曲は簡潔な単一楽章からなる。リリズムとアイロニーの共存が後年の作風を予告する。

シューベルト：弦楽四重奏曲第13番 イ短調 D. 804 「ロザムンデ」

1824年、フランツ・シューベルト(1797～1828)は室内楽に集中的に取り組む。この年、弦楽四重奏曲第13番「ロザムンデ」をはじめ、同第14番「死と乙女」、八重奏曲などの傑作が生み出された。弦楽四重奏曲第13番「ロザムンデ」はシュパンツィヒ弦楽四重奏団により初演され、珍しくも作曲者の生前に出版が実現している。曲は4つの楽章から構成され、そのすべてがピアノシモで開始される。第1楽章はメランコリックなアレグロ。第2楽章では劇音楽「ロザムンデ」の有名な間奏曲が用いられている。第3楽章は愁いを帯びたメヌエット。第4楽章は内気ではにかむようなフィナーレ。

ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲第2番 イ長調 作品81

1887年、アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)は15年前に書いた初期の作品、ピアノ五重奏曲第1番を改訂しようと考えた。だが、この試みは同じ編成と同じ調性によるまったく新たな作品、ピアノ五重奏曲第2番に結実した。翌年のプラハでの初演は成功を収め、後にチャイコフスキーからも称賛されている。第1楽章はのびやかなチェロの主題で幕を開け、情熱的な楽想がくりひろげられる。第2楽章は物悲しいドゥムカ(東欧の哀悼歌)。第3楽章はフリアント(ボヘミアの急速な民族舞曲)。陽気な主部と夢幻的な中間部の対比が鮮やか。第4楽章はフガート(フーガ風の模倣書法によるパッセージ)を用いたエネルギッシュなフィナーレ。

(いいお よういち・音楽ジャーナリスト)